秋江

大田錦城

蓼花半ば老ゆ野塘の秋
水落ちて空江澹として流れず
渡口の漁家将に夕照ならんとす
一双の白鷺虚舟を護る

【作者】太田 錦城（一七六五～一八二五年）（明和二年～文政八年）、江戸時代後期の折衷派の儒学者。名は元貞，字は公幹，通称は才佐，錦城と号した。加賀大聖寺の人。本草学にも通じた医者玄覚の第八子。初め兄伯恒に医を学び，のち医を捨て皆川淇園（京都），山本北山（江戸）に学ぶ。やがて刻苦精励して一家をなす。初め吉田侯，のち加賀侯に仕える(三〇〇石)。錦城の折衷学は宋学に毛奇齢，朱彝尊らの清朝初期の考証学を取入れたもの。博識をもって聞え，考証にすぐれていた。著書『九経談』（十巻），『疑問録』『仁説三書』『一貫名義』など。随筆に『梧窓漫筆』（六巻）がある。六十一歳

【語釈】＊秋江…秋の河口の情景描写。　＊蓼花…蓼（たで）の赤い花。　＊野塘…野外の堤防。　＊渡口…渡し場。
＊虚舟…人のなき空き舟。

【通釈】一双の白鷺がカラの小舟を見つめている、渡し場の漁師の住家にいままさに夕映えが射し。たって流れることもない、水量が減りぽっかりと空洞になったような川の水は静かにたゆ、荒野の堤沿いに咲いた蓼の花も漢字の、この詩は。風景や心情の描写に洗練度が高くなります、漢詩は円熟期に入り、漢字の、この詩は。風景や心情の描写に洗練度が高くなります、漢詩は円熟期に入り、
洗練度が高くなります、漢詩は円熟期に入り、江戸も後期になると葉も枯れて赤い実のような点々が目立つ秋、だが未だ大して荒涼とはしないまでの頃か。